

最上小国川の清流を守りましょう 「最上小国川ダム」計画を見直し ダムによらない治水対策を！



最上小国川ダム

ダム建設見直しを求める要請署名にご協力下さい

最上小国川は、ダムのない川で、天然アユの宝庫です。

ところが山形県は、ダムによらない水害防止対策が可能であるにもかかわらず、赤倉温泉の上流2kmに、ダムをつくらうとしています。

いまや、『ダムによらない治水』は、日本と世界の常識になろうとしています。

ダムによる環境破壊から、最上小国川の清流とアユを守るために、ダム建設をやめさせましょう。

「ダムありき」でゆがめられた県の治水計画
ダムによらない最上小国川の治水は可能です

山形県が行った“ダム計画見直し”は、『ダムありき』でゆがめられたものです。ダム建設による自然環境や観光などへの悪影響をまともに検討していません。

県の河川管理の不手際で、河床が高くなっていることで水害が起こっています。河床掘削と堤防嵩上げなどで、水害は防げます。温泉の専門家は、「赤倉温泉に影響させずに河道改修できる」と言っています。

アユ釣りの経済効果・年間22億円

最上小国川には、1年間に伸べ3万人の釣り客が訪れます。その経済効果だけで、年間約22億円になると水産経済学の専門家は算定しています。

もし、ここにダムが出来て環境が悪くなれば、釣り客は半分にになり、年間10億円規模の損失となります。

“穴あきダム”は危ない！

山形県が造ろうとしている「流水型ダム」（通称：穴あきダム）は、洪水時の濁りが長く続くだけでなく、水害の恐れがない中小洪水も溜めてしまうことから、アユへの悪影響は避けられません。

“穴あきダム”は、洪水時の土砂や流木で穴がふさがってしまえば、どうしようもなくなる、危険なダムです。



最上小国川の清流を守る会

（事務局）新庄市城西町5-37

河道改修で水害を防ぐことができます 県は「ダムによらない治水」へ政策転換を

Q1：赤倉地域の水害の原因は何ですか



写真1

写真1は、赤倉温泉の下流側から上流を見た様子です。温泉内の河川が急に高くなっていることが分かります。その原因は、県が造った写真2の「コンクリート堰」です。この「堰」があることで、写真3のように上流側に砂礫が堆積し河床が高くなり、河岸にせり出した旅館などもあって水害の危険を大きくしています。この状態を放置して、上流にダムを造っただけで水害の危険はなくなりません。



写真2



写真3

赤倉温泉の水害は、本来の河床より1～2mも高くしてきた河川管理の不手際が、一番の原因です。この「堰」を撤去して、たまった砂礫を取り除いて河床を下げ、あわせて護岸を1m程度嵩上げすることで、水害の危険が大幅に小さくなることは明らかです。

Q2：赤倉温泉に影響するので、河道改修はできないと聞きましたが、実際はどうなのですか。

赤倉温泉の地下には70℃を越える温泉水が豊富に存在し、河床を1～2m程度掘削しても枯渇することはありません。A旅館には、湯船に直接湧き出している源泉がありますが、ここはボーリング源泉より温度が20℃近く低く、湯量が川の水量によって増減したり、川が濁ると一緒に濁ったりしています。この源泉は、河川側の水位を保つ対策をとれば、改修工事の影響は避けられます。『温泉への影響…』はダム建設の口実にすぎません。

川辺孝幸・山形大学教授の話
私は、県の依頼で二〇〇八年の温泉調査に参加しましたが、河川と岩風呂の相互関係を明らかにする、踏み込んだ調査はきわめて不十分でした。
あの調査から『河床掘削工事は一切出さない』、という結論にはなりません。
『A旅館の岩風呂付近の水位バランスを保ってやれば、この源泉に対する影響が避けられるだけでなく、安定してお湯が湧き出るようになる効果もある』と言えます。具体的にどんな土木工法と対策をとるか、県はしっかり検討するべきです。

Q3：河道改修だけではなく、水害から人命を守る対策も必要ではないですか。

写真4は、2006年の洪水時の赤倉温泉内の様子です。東日本大震災の経験が教えているように、どんな大きな堤防やダムを造ったとしても、それを越える自然災害を防ぐことは出来ません。大切なことは「どんなことがあっても人命を守る」体制を整えることではないでしょうか。県や町は「ダムを造れば、水害も地域振興も解決する」と“ダム神話”のように言っていますが、ダム建設にかかる予算と人手は、地域の防災のためにもっと有効に使うべきです。



写真4

平成18年12月27日の赤倉温泉地域の様子。
このときダムがあったとして、下がる水位は47cm。
ポンプ排水しているのは、川に排水できなくなった周辺の
水で、ダムでは防げません。（県の資料より）

ダム建設見直しを求める要請署名にご協力下さい